

続く第五章では、「丸子船の再生」として、琵琶湖博物館展示のための丸子船復元制作をとりあげて、その作業過程のみならず、かつての船大工の暮らしをモノグラフとして紹介している。

終章では、「離合の舟景」と題し、これからの水辺の暮らしの再構築に資するものとしての舟景研究の意義を説き、舟景に象徴されるような地域文化に対し、その遺産化からの脱却こそが今後の新しい行動指針となっていくことを説いている。

著者は本書の冒頭で、過去の水辺の暮らし方を論ずるだけでなく、現代の地域文化の再生に向かう道のりをも視野に入れたいとの研究意図を示している。現代の地域文化の再生とは、おそらく水環境を中心とした地域づくり・まちおこしの動向を指すものと考えられるが、この地域文化の再生に対する言及がやや具体性を欠き、理念論にとどまっているのが惜まれる。終章において、地域文化に関して、遺産化を脱し現代の生活に振り向けていくことで継承の可能性を掲示しているが、滋賀県ではそのような認識に基づく取り組みはすでに各地で行われており、現場で今求められているのは、現代化された生活の中に水環境とのつながりをどのように再構築していくかの具体的方策である。再生すべき地域文化の質そのものが問われている現段階においては、地域文化再生の道のりを論じるには、地域環境政策を含め、さらに一歩踏み込んだ議論が必要となってくる。

さて、本書で用いられたモノグラフという手法は、地理学、民俗学、社会学などにおいて頻繁に用いられる手法であるが、一集団あるいは一個人について詳細なデータを取り、諸事象を具体的に記録するものというイメージがある。本書の最大の特徴は、各事象を淡々と記録していくのみでなく、諸事象間の関係性を明らかにしているところにあると評者は考える。この点は、関係性の学問、総合的な視角としての地理学の真価が発揮されたものということもできよう。換言すれば、地理学の立場からは、「環境」というものが各事象の有機的な連関によって織りなされる複雑な複合体であることを提示し、環境問題に対しても、小手先の対症療法では決して本質的な解決策にはなりえないという警鐘を発するべきといえようか。

著者は終章において、現在の水辺の環境保全について触れ、「一昔前の多様な水辺の暮らしをすっかり忘れ、あるいはないものとして、水辺の景観を余暇としての親水などに狭めすぎてはいないだ

ろうか」との問いを投げかけている。評者はこの問いを、自然との関わり喪失・狭小化が環境問題の根底にあるという著者の視点だと理解する。この視点を持つことによって、本書は琵琶湖のモノグラフィからグローバルな環境問題への視角を引き出すことに成功している。「環境」という対象を地理学において再考する足掛かりとなる好著である。

(佐野静代)

加賀美雅弘 著：『ハブスブルク帝国を旅する』

講談社 1997年6月

286ページ 700円(本体)

学術書ではなく、講談社現代新書の一般読者向けの書物であるが、著者が自ら足を運んで調べ上げたハブスブルク帝国の、いわば「野外歴史地理学」の書物として、日本はもとより、外国でも例を見ないすぐれた出来の読み物であると判断されるので、ここで取り上げることにする。

本書の下敷きになっているのは、ウィーンおよびブダペストの古書店街で、著者がたまたま入手した3冊のオーストリア・ハンガリー帝国のガイドブックである。すなわち、*Illustrierter Wegweiser durch Kurorte, Sommerfrischen und Hotels* (1908), *Illustriertes Lexikon der Bade-, Brunnen-, Luftkurorte u. Heilanstalten* (1926), そして *Baedeker* の1903年版であって、本書は20世紀初頭のハブスブルク帝国の旅行事情を、当時のガイドブックによりながら吟味するとともに、それぞれの場所が現在どのようになっているかということ、現地を旅しながら報告したものである。第1次世界大戦後、帝国の版図は多数の国に塗り替えられ、現在は10以上の国に分かれているが、当時の旅行ルートは、当然のことながら、現在の国境線とは無関係に設定されていた。20世紀初頭の旅行が鉄道を主としてなされていたので、第1部においては、オーストリア・ハンガリー帝国における鉄道網の発達が紹介されている。ベデカーでは6つの自転車旅行コースも紹介されているが、すべてのコースがドイツ語圏である帝国の西半分にあり、また5つまでが山を越えて南の世界を訪れるコースであったという著者の指摘は興味深い。

第2部では、10のルートに分けて、歴史地理学的な探訪が報告されている。ウィーンと郊外リゾートへの旅における18世紀末の運河計画、ボヘミア森における馬車鉄道のように、それぞれの旅の記

述には、かなり詳細な歴史地理学的なトピックの記述がある。どちらかというところ、旧ユーゴスラビアや南チロルなど、「帝国」の南部やボヘミアの記述が詳しいのに対して、旧ハンガリー王国に関しては現状の報告が主になっているのは、全体の記述がドイツ語のガイドブックを下敷きにしていて、これらの地域を自由に調査できるようになってから、まだ日が浅いことによるものであろう。しかし、ハンガリーに関して、その東西のコントラストが、冷戦構造の解消後の現象ではなく、深く歴史に根を下ろしたものであるという指摘は重要である。

「旅のおわりに」と題された短い結論部においては、19世紀的な旅の時代精神を、ロマン主義に培われたものであると指摘し、旧ハプスブルグ帝国領の景観を特色づけるものとして、「中世以来のドイツ人入植の計画」、「中世以来の封建体制の景観」、「他民族主義の景観」、「民族主義の景観」、「冷戦体制の景観」、「ポスト冷戦の景観」の6つをあげ、これらが互いに関連しあい、時間的に連続していることを著者は指摘している。現在の中央ヨーロッパや東ヨーロッパにおける困難な経済的問題、民族的問題との関連で、ハプスブルグ帝国がいろいろと論じられるようになっていくことは事実である。そしてこれらの問題が、著者も述べているように、ハプスブルグ帝国へのノスタルジーだけで解決されるものでないことは、もちろんである。著者は決して19世紀的ロマン主義の精神で現代世界を旅しているのではないので、一般読者が本書からロマン主義的旅へのノスタルジーという読後感だけを得るとすれば、それは残念なことである。

現在、旧帝国の版図でたくさんのドイツ人観光客に対する反発、あるいはドイツ系住民と非ドイツ系住民との間の対立があることを報告すること

は、ドイツ語で書かれたガイドブックを下敷きにして歴史地理学的な読み物を書く場合にはもちろん必要なことであるが、ハプスブルク帝国の多民族主義という場合には、ウィーンから中央集権的、一元的に押しつけられた意志決定のみでなく、体制の側からの民族の多様性を容認する側面があったことにも注目する必要があるのではなかろうか。第1次世界大戦後のベルサイユ体制を「民族自決」と規定するのは容易であるが、重要なことはヨーロッパ的「民族自決」がいかにも多くの新しい虚構を作り出したかということであろう。オーストリア・ハンガリー帝国とオスマン帝国の、いわば「戦後処理」のためにだけパリに集まった戦勝国によって議論された「民族自決」は、中央ヨーロッパと東ヨーロッパの限られた支配階層と戦勝国との取引にもとづいて、エスニシティの分布が複雑で、本来線を引くことのできない場所に国境線を引き、新しい形でエスニックマイノリティを各地で作りに出したのではなかったであろうか。ドイツ系住民だけが問題だったのではないのである。一般読者向けの本書に、中央ヨーロッパおよび東ヨーロッパにおける複数エスニシティの問題についての、立ち入った記述を期待するのは無理であることは承知しているが、歴史地理学徒としては、ベルサイユ体制と旧ソ連体制とが作り出した民族自決主義の虚構を念頭におく必要があるであろう。

地理学者が、地理学の観点をつらぬきながら、一般読者に広く読まれる本を書き、成功している事例は、残念ながら非常に少ない。この意味において、見事な出来ばえを示している本書は、歴史地理学の専門家にとっても注目に値する書物と言えよう。

(竹内啓一)